



# AGULI

Aoyama Gakuin University Library Information

青山学院大学図書館報

## 特集 卒論・レポート必勝法 Part5

No.82

<http://www.agulin.aoyama.ac.jp/>

July 1, 2008



VERVE

### 目次

巻頭エッセイ  
夢と現実 …… 山本 吉宣 2

### 特集

#### 「卒論・レポート必勝法 Part 5」

図書館を歩こう  
大屋多詠子 …… 4

書物の読み方  
中澤 進一 …… 5

論文のテーマ設定について  
久保 茂樹 …… 6

卒論ノートを手し、卒論づくりの旅に出よう  
吉田 猛 …… 7

先行研究や情報をどう生かすか  
大林 弘堯 …… 8

テーマは作業経験ほど重要ではない  
山下 喜代 …… 9

卒業論文ブチアドバイス  
清水 台生 …… 10

王道はない  
石崎 晴己 …… 11

Joy of Work, Joy at Work  
清水 康司 …… 12

ビジネス実務とレポート  
眞田 久雄 …… 13

海外図書館紹介  
イタリア国立サン・マルチャーナ  
図書館を訪ねて (その2)  
…… 三嶋 輝夫 14

展示資料紹介  
『ヴェルヴ』 …… 15

図書館広報板 …… 16

# 夢と現実

館長 山本吉宣  
YAMAMOTO Yoshinobu

フィリップ・M・パーカーという作者をご存知だろうか。世界的な、あるいは歴史的に最多産の作家であり、今まで20万冊の本を書き、アメリカアマゾンの本のリストには8万冊以上の著作が掲載されている。それらの本は医学関係のものであったり、クロスワードパズルについてのものであったりする。このように聞くとまずは大いに驚かれよう。実は、パーカーは、コンパイラーのプログラムを開発し、あるテーマを設定し、インターネットを渉猟し、それを本の形にしているのである。ナンンだと思われるかもしれない。しかし、パーカーのプログラムは、本や論文を書くときの人間の思考方式の少なくとも一部を表現している。そして、パーカーは、本当の本や詩をコンピュータで書くことも試みているという。彼の本はオンデマンドで、また電子データで販売されている。ちなみに、パーカーは、立派な経済学者であり、大学教授である。いくつものまともな学術書も出版している。

私も、そしてたぶん皆さんも、ある夢を持っていよう。図書館に行くと、本や論文に関して自分の考えているテーマを唱えれば、たちどころにすべての資料がそろい、あまつさえそのテーマに関して草稿を作成してくれる、という夢である。これは怠惰なものが持つ夢かもしれない。またそれは著作権を侵したり、剽窃というルール違反につながる夢かもしれない。われわれ教員はもちろん、学生諸君も、論文やレポートを書くとき、人の著作を無断

で使ったり、インターネットからの出所を示さず貼り付けたりすることは厳に禁じられている。このようなことはあるが、過去を振り返ってみると、緩やかにではあるが、夢に向かって一步一步進んでいるように見える。私が学生のころ、それは今から40年以上前のことであるが、コピー機はなく、本や論文を読んで手書きで必要な箇所を写していた。また、図書館の本の目録も、OPACなどなく、紙のカードで本を探した。本や論文が図書館にハードコピーがあり、手足を使って本を探したり、コピーをしたりした。古典的な図書館像である。

しかし時を経て、いまやインターネットで日本全国の図書のありかを探することができる。また電子ジャーナルというシステムがあり、青山学院の図書館のシステムを通して、欧文、特に英文の雑誌は自由に閲覧できる。さらに、それらの論文を必要とあればコピーすることができる。また、かなりのジャーナルでハードコピーが発行される前に、掲載予定論文が電子データで見られるようになってきている。ただ、バックナンバーについていえば、十数年前ぐらいのものからしか電子データではとれないことが多い。それより前のものを見ようとすると図書館に行かなければならない。

ジャーナルだけではなく、いまや新聞その他のデータにひろくアクセスできる。たとえば、アメリカの議会資料なども図書館のシステムを通して容易に得ることができる。さらに、最近では、電子本(e-books)というも

のが開発されつつある。これは図書館が本屋と契約して、本をインターネットを通して閲覧できる仕組みである。現在では、事典などのレファレンスで進んでいるが、将来は普通の本にも広がっていくであろう。

このように見ると、電子空間の図書館においては、そこに入り、自分の持っているテーマをいえば、たちどころに必要な本や論文、データが揃うという夢に近づいており、わが図書館もそのようなサービス機能をオーガナイズする役割を与えられている。このような方向は明らかであるが、いくつかの限界も存在する。一つは、このような方向に関しては、日本は圧倒的に遅れていることである。日本のジャーナル等は、例外があるもののほとんど電子化されていない。二つには、電子化は、最近の出版物の話であり、古い図書まで手が回らない。とくに書籍はそうである。三つには、レポートを書いたり、論文を書いたりするときには、本や論文をハードコピーで手元においておくことが必要である。したがって、電子ジャーナルなどの論文をコピーしたり、電子本をパソコンの画面上で見ることができるとしても、ハードコピーをとることが必要であることも多い。それを個々の人がやるよりも図書館においてある本や雑誌を見るほうが便利であり、紙を使わず環境にやさしいものであるかもしれない。

ただ、一番の問題は、テーマを唱え、資料が提供されても、論文やレポートの草稿を自動的

に書いてくれるか、ということである。冒頭で述べたパーカー教授の本に関しては、それは資料の羅列であり、本ではないという批判が当然のことながら多い。また、すでにのべたように、電子空間の図書館の資料はまだ不完全である。私はかつて、修士論文でインターネットで取れる資料だけで書いたものを読んだことがある。きわめて薄っぺらなものであった。論文やレポートを書くには、コンピュータのプログラムにのる定型的なもの以上のものが必要である。

古典的な図書館には、電子空間の図書館では果たせないいくつかの役割がある。図書館に机やキャレルがあり、周りに必要な図書や検索機能、コピー機などがあり、そこでレポートを書いたり、期末試験の勉強をしたりする。また、小部屋や談話室があり、そこで友人と議論をする。学生生活に不可欠のサービスを提供するのが図書館である。大学基準協会が、学生数の10%の座席を図書館が持つように、という基準を示すゆえんである（青山キャンパスの図書館は8.8%である）。また、ハードコピーの図書は、我が青山学院の図書館でも、年に2万3千冊ぐらい新規に入ってくるという。物理的な空間はパンク状態である。

以上のような夢と現実をいかにつなげていくかが今後の長期的な課題であり、また現実の多くの問題は今すぐ対処しなければならない。このような中で、館長となって、責任の重さを感じる昨今である。

(国際政治経済学部教授 国際政治学)

## 図書館を歩こう

大屋多詠子

OYA Taeko

何を為すにも同じことであるが、卒論を仕上げられるにも、事前の準備が重要である。準備さえ十全にできていれば、書き上げるのは恐れるほどには時間はかからない。その準備には、図書館を十二分に活用することが不可欠である。私は学生時代、出身大学の付属図書館で出納等の夜間アルバイトをしていたこともあり、図書館には大変お世話になった。ここでは、学生時代を振り返りながら、卒論執筆時における私流の図書館利用法について述べてみようと思う。

まず、当然ながら、卒論に取り上げるテーマを絞り込まなくてはならない。関心のある対象について、未だぼんやりとした輪郭でしかないアイデアを明確な構想にするためには、それに関する先行文献を探すことが必要である。このとき、図書館のOPACが活躍する。思い浮かぶキーワードから手当たり次第検索して、該当する書籍を片端から繰ってみる。斜め読みであってもいずれ心に掛かる箇所に行き当たる。その過程で文献に引用されている資料・論文等を遡ってゆけば、当該研究史をたどることもできる。そのうちに、具体的に何を明らかにしたいかを自分自身で掴むことができるだろう。その分野でもまだ研究の余地のある箇所を見通せればそれをテーマにするに越したことはない。

何を明らかにしたいかテーマが決まれば、次に章立て(目次)を考えなくてはならない。何と何を調べれば、そのテーマについて明らかにすることができるか、という手順をリストアップする作業である。ここまでできてしまえば、もう半ばは終わったも同然、あとはその計画通りに調査してその結果を考察すればよい。

さて図書館が本当に活躍するのは調査の段階である。図書資料はもとより映像資料、データベース、電子ジャーナル等が利用できる。こうした情報についてわからないことはレファレンスカウンターで教えてもらうことができる。ここまでは普通の利用法だが、これでは図書館の中でも利用するのはいつも同じ棚ということになりがちである。私は図書館のアルバイトの際、普段自分が触らない棚への返本・配架作業を通じて、それまで見落としていた文献が思わぬ棚にあることに気付いた経験をたびたびした。他学科の学生が借りた他分野の文献の研究法に手がかりを得られることもあるのである。調査で行き詰まったら、近隣の研究分野を手始めに、棚から棚へ図書館を一巡するのもたまには良いかもしれない。

調査が終われば、いよいよ執筆である。気負わずにわかりやすさを第一に順を追って、調べたこと、わかったこと、そこから導き出された結論を書けばよい。できれば、書き上げた後、少し時間をおいてから読み直してみると良い。書いた直後は自分の文章に酔っていて冷静に読めないことが多い。時間を置くと、説明不足でわかりにくい箇所などが見えてくる。自分には自明のことでも他人から見れば初めての内容であることもあるのである。

そのテーマを真剣に調べ上げたその時点ではきっとそのテーマについて一番詳しいのは自分ひとりに違いない。それが自己満足に過ぎなかったとしても、地道な努力で卒論を仕上げた後の充実感は爽快である。

(文学部准教授 日本文学科)

## 書物の読み方

中澤進一

NAKAZAWA Shinichi

### <論文の書き方・レポートの書き方>

今回の特集のテーマは、卒論・レポート必勝法になっているが、残念ながら私はハウツーものに余り関心はなく、大したことは言えない。敢えて言うなら、書き方を知るだけであれば、一定の評価を受けたレポートなり論文を読んで、その書き方を自分で学べばよい。たとえばレポートについていえば、毎年官公庁からだされるいろいろな白書から学ぶことができる。白書が大体同じ形式で出来上がっていることに気付くと思う。論文も書き方（形式）だけであれば、優れた論文を読めば知ることができる。しかし、それを知ったからといって論文が書けるわけではない。

論文を書くにあたって最も重要なものは何か。それは問題の所在にある。問題がどこにあるかということがわかれば、論文は半分済んだに等しいと言われるほどである。学生諸君が卒業論文を書くにあたって、果たして問題の所在でどれ程悩み苦しむか知らない。しかしパッチワークになりがちな学生の論文を見ると、問題意識の弱さを感じる人が多い。

### <書物の読み方>

ここで私は書物の読み方について少し話してみたい。書物は批判的に読むものだとよく言われる。そういう読み方も確かにあるかも知れないが、必ずしもすべての人にとってこの読み方が良いわけではない。これから知識を重ね思考を形成しなくてはならない学生諸君には、むしろ批判することは止めて、著者の言わんとしていることをひたすら虚心に受

け止め、全面的に理解しようと努める読み方をしてほしいと思う。当然そのためには読む書物は選ばなくてはならないが、こういった読書に耐えられる書物は古典的な名著に限られよう。このような名著を、著者の知性の高さを慕ってひたすら地道に読んで、その知性に一步でも近づこうとするのである。こうすることによって学生諸君が成長し、これまでの知性もまた引き継がれてゆくことになる。

最近の学生諸君は書物を高価と感ずるようになっているが、しかし名著は本当は高価ではないと私は思う。というのも、名著は、何度読んでもそのたびに新しい発見や認識をわれわれに与えてくれるものである。だから座右の書は名著であることが多いし、繰り返し読むことができるなら、名著は随分安価な本だと言えるのではあるまいか。最近の出版界では古典がひとつのブームと言われているようであるが、名著の復刊は、学生諸君にとって大変恵まれた状況がやってきているように私には思える。

実は上のような態度で名著を読めば、問題意識の涵養にもなる。急がば回れで、学生時代には是非名著を1冊でも多く読むことをお勧めしたい。

(経済学部教授 国際経済学)

## 論文のテーマ設定について

久保茂樹

KUBO Shigeki

敬愛する先輩のI先生から、卒論・レポート必勝法について原稿を書けとの依頼を受けた。もとより「必勝法」と呼べるようなものは持ち合わせていないが、せっかくの機会なので、論文のテーマ設定について、日頃感じていることを書かせてもらうことにした。

なお、私は法学部の人間なので、どうしても法律論文に偏った話になることを初めにお断りしておきたい。

## ◇論文テーマには「問い」が不可欠である

よく言われることだが、論文は小説やエッセイなどと違って、「問い」と「結論（問いに対する一応の答）」をもつことが必要とされる。

そんなことは知ってるよと言われるかもしれないが、実際に学生の皆さんの論文を読んでいると、何を論じようとしているのかよくわからない（つまり、「問い」が明確でない）ものが少なくない。

論文を書くときには、なぜその問題が問題とされるのか、換言すれば、その問題に「いかなる問い」が含まれているのかを、明確にしておくことが求められるのである。

あなたがいま「〇〇について論文を書く」と決めたとしても、それだけでは論文のテーマが設定されたことにはならないだろう。この場合、「〇〇」は論文の対象をいうに過ぎず、「問い」を表すものではないからだ。テーマの設定がなされたと言い得るためには、例えば、「△△説と□□説の違いを論ずることにはどのような意義があるのか」だとか、「判例はどうして学説とは異なる考え方をとるの

か」などといった実体のある問題関心を（タイトルに現れるかどうかはともかくとして）伴っていないなければならないのである。

## ◇「問い」を見出すには、それなりの「勉強」が必要になる

もちろん、初めからこうした「問い」が見出せる人は多くないだろう。たいていの場合は、「〇〇について論文を書きたい」という漠然とした思いからスタートするのではなからうか。それはそれで構わないのである。要は、「問い」を見出すには、それなりの勉強が必要になるという認識（あるいは覚悟）を持つことなのである。

むずかしい議論はともかくとして、とりあえず、当たりを付けた分野の基本文献に目を通すことから始めよう。基本文献を読み進むうちに、分かっていること分からないことの区別が付けられるようになり、論文において取り上げるべき「問い」が見えてくるだろう。

なお、その分野でよく引用される論文があれば、そこには間違いなくテーマ設定のヒントが詰まっていると考えてよい。

## ◇最後に一言

一度立てた「問い」は、文献を読み進むなかで、しばしば、より本質的な「問い」へと深化する。論文を書くには、当初の「問い」を立て直す思考の柔軟さも求められる。

最近、とみに頭の固くなってきたわが身を反省しつつ、この辺で筆を置くことにしたい。

（法学部教授 行政法）

## 卒論ノートを手にも、卒論づくりの旅に出よう

吉田 猛

YOSHIDA Takeshi

課題が指定され短期間のうちに仕上げなければならない短めのレポートとは異なり、卒論は自らで課題を定め、長期間にわたって持続的に調査研究を行わなければならない。その上長文となる。このような特徴がある卒論を仕上げるためには、「問題意識」「やる気」「刺激と仕組み」をうまく組み合わせなければならぬ。

「問題意識」は、研究分野を見定め、解くべき課題（テーマ）を発見し、それを実際に解いていくために不可欠である。

たとえ研究分野が選択できたとしても、一つの研究分野に数多くの課題があり、分野の選択が即課題の設定につながることは少ない。そのため、「やる気」を持ち続け、当該分野の中を根気よく探索して課題を見つけ出すことが必要となる。やる気の大本は、興味・関心である（別の源泉もあるが紙幅の関係上ここでは省く）。研究上欠かせないが意識されることは少ない。そのために、自らの内面を静かに顧みる時間が必要となる。自宅で沈黙考することに加え、図書館で研究分野の棚の周りを歩き回り、気になる本を手にし目次や一部を眺めてみる。このようなアナログ的な方法だけではなく、図書館の情報端末にキーワードを打ち込んで文献を探すことも忘れてはならない。図書館は、課題の解決結果の宝庫であるとともに、新たな課題を見つける宝庫でもあるからだ。

「問題意識」や「やる気」が必要だということは耳にたこができるほど聞かされたという人の中には、次に「刺激と仕組み」を話

してみたい。何はさておき、卒論ノートを作って欲しい。そこには、研究分野と卒論課題という項目を作るとともに、自分の持つ関心／興味およびおもしろいと思った事柄という項目を立てる。自分の内面を振り返った結果とともに、興味を持った事柄を書き留めるためだ。そしてそれになぜ関心を持ったかを一言書き添えておけば内面的な関心を引き出すきっかけともなる。卒論ノートは絶えず世の中の動きを探索し記録していく道具であるとともに自らの関心を書き留める手段となる。

このノートは、卒論を書き上げるための仕組みである。そのため、自己の内面の整理や外部の出来事のメモとしてだけではなく、研究スケジュールを作り書き留めておくことも必要となる。まず卒論研究時間を確保しなければならない。演習の時間や準備を含めて週10時間を確保しよう。

しかし、スケジュールをその通り実行するのは自分一人だけでは難しい。そのために、一緒になって卒論を取り組む友人を見つけ、報告をしあう時間を作り、「刺激」しあう必要がある。定期的に報告をするということでスケジュールを守れるだけでなく、自らの考えをまとめる、あるいは違った視点からの意見が聞けるという絶好の機会となる。週2時間ぐらいとれば申し分ない。季節がよければ外で、そうでない時には建物の中で。

さあ、今すぐ卒論ノートをつくり、友とともに卒論作成の旅に出てみよう。

（経営学部教授 マネジメント）

## 先行研究や情報をどう生かすか

大林 弘 堯

OBAYASHI Hirotaka

よい論文やレポートの条件とは何か。この問いには人それぞれ意見があると思いますが、ここではその必要条件のひとつを「様々な文献や資料から得られる知見を整理し、自らの主張や意見を説得的に論じるもの」としたうえで、レポートや論文を作成する際に、得られた情報をどのように盛り込むべきかについて考えてみたいと思います。

さて、論文において自分の意見を提示したり、仮説を立証したりする場合には、豊富な先行研究や資料から様々な議論を援用し、批判的に検討しなければなりません。再現実験や追試が困難な社会科学においては、特にこれらの作業の必要性が高いと思われます。では、ただ闇雲に沢山の文献を読み、先行研究の議論を盛り込めば、良い論文は出来上がるのでしょうか。おそらく、そうではありません。

たしかに、多くの高名な学者の名や難解な文献が脚注に並べば、論文の読み手は「なかなか勉強しているな」と思ってくれるかもしれませんが、そうした論文は、書き手の不在という状況に陥ってしまうのではないかと思います。せっかくのレポートや卒論に、他の論者は盛んに登場しているにもかかわらず、書き手である自分の筆跡が残せないのは、少し残念だと思います。

先行研究の議論を援用することによる説得性の向上と、論文に自分の形跡を残すことは、互いに両立しがたいことのように思われがちですが、先行研究の議論を組み合わせ、構築する際に、自分を論文に投射することができると考えています。自分が立てた仮説を立証

するうえで、誰の、どのような論考を、どこに配置すればよいのか。あるいは、どの情報が組み合わせれば、より強力で説得的な議論になるのか。その思考プロセスは書き手である自分独自のものであり、それが自分らしさとして論文に反映するのではないかと考えます。少しもったいぶった言い方ですが、様々な先行研究を組み合わせただけの論文は、まるでジグソー・パズルのようなものですが、先行研究の組み合わせや統合と言った点に自覚的になることによって、情報と情報との接合部を自然に目立たなくさせ、全体としてより調和した論文になるのだらうと思います。

情報をただ詰め込むのではなく、それらを有機的に構築して論文を書くということ。これを達成するためには、自分が論文で主張したいことは何であり、「何が分かれば説得力のある論文になるのか」ということを、常に考えなければならない、また、それ以外に近道は無いと思います。これは、「いま読んでいる文献は、自分の論文にとってどのような意味をもっているのか」を常に考えなければならないということです。

結局のところ、私がこのエッセイで言いたかったことは、受動的に先行研究の情報を受け入れるのではなく、常に思考しながら文献を扱わなければならないという至極当然のことです。が、当然であるがゆえに忘れやすいことだとも思いますし、私自身も繰り返し立ち返りたいと思います。

(国際政治経済学研究科 国際政治学専攻)

## テーマは作業経験ほど重要ではない

山下喜代

YAMASHITA Kiyō

卒業論文など研究テーマを自分で決めなければならぬ場合、どのようなテーマにすればよいのか迷うことが多いと思います。しかし、イタリアの哲学者であり、小説家であるウンベルト・エコはその著書\*『論文作法』で、「論文のテーマは、これに要する作業経験ほど重要ではない」と述べています。そして、「論文を作成することは、独特のアイデアを整頓し、資料をきちんと整理する技術に習熟する一種の方法論的作業」であって、「研究方法やそこから得られる経験に比べれば、テーマは二次的なものである」としています。もちろん、1年近い時間をかけて取り組む卒業論文であれば、自分の関心の深いテーマを選ぶにこしたことはありません。しかし、どのようなテーマに決めたとしても、踏むべき論文作成の手順を確実に進めていったなら、必ずそれ相応の研究経験という成果を手にすることができるのです。

では、論文作成の手順とはどのようなものでしょうか。概略を示すと以下ようになります。

- ①具体的なテーマを探し出す。
- ②テーマに関する資料を収集する。  
(資料には、分析の直接的対象となる一次資料のデータと、先行研究の文献などの二次資料がある。)
- ③収集した資料を整理する。
- ④資料を分析、考察し、結論を導く。
- ⑤論文を読むものが理解できるように記述する。

紙幅の関係で、手順について詳しく述べることはできませんが、「論文・レポートの書

き方」に類する本は数多くあり、それには論文作成の手順も書かれています。一度は目を通しておくと良いでしょう。

以下では⑤に関連することを述べたいと思います。実際に論文を書くに当たっては、論文の形式とルールに留意することが必要です。論文は、「序論」「本論」「結論」に当たる部分があり、それに加えて「注」や「参考文献」を示すという決まった形式をもちます。その形式は研究過程を合理的に提示するもので、それぞれの部分に書くべき要素はある程度決まっています。「論文は形式より、内容だ」と思う人もいるかもしれませんが、確実な作業手順を踏んだ研究は、びたりとこの論文形式にはまるもので、まずはそのような形の整った論文を作成することを目指すべきでしょう。

また、ルールについては、最も重要なことは引用のルールを守ることだと思います。先行研究の記述を引用であることを示さずに、あたかも自説のごとくそっくりそのまま書いたりするのは、恥ずべきルール違反です。そして、この違反はレポートなどでは本当に多く見られることです。引用は恥ずかしいことではありません。参考文献の記述を適切に引用しながら、自分の言葉で堂々と論を展開してほしいものです。そのような作業経験こそが、卒業論文を書く最大の目的と言えます。

\*ウンベルト・エコ著『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』(谷口勇訳 而立書房 1991年)

(文学部教授 日本語学)

## 卒業論文プチアドバイス

清水 台生

SHIMIZU Taisei

皆さんは図書館をどのくらい利用しているでしょうか。おそらくほとんどの方は1度は足を運んだことがあるのではないのでしょうか。私自身は、レポートの問題を解く際の参考書を探すためや、DVDなどを楽しむために利用することが多いのですが、あまりの快適さにたまに居眠りをしてしまうことすらあります…

ここでは、卒業論文を書くときの図書館との付き合い方について、自分の経験も交えながら書きたいと思います。私自身は理工学部出身のため、残念ながら他学部について詳しくは分かりませんが、理工学部の方なら卒業するために卒業研究を行い、「卒業論文」を書かなくてはなりません。その際に少しでも参考になるといいのですが、また、他学部の方にも有用な情報が一つでもあれば幸いです。

卒業論文を書く上で乗り越えなくてはならない山として次の2つが挙げられます。まずは実験を行い結果を出すということ。そして、その結果に対する考察や結論を書くことです。皆さんは、授業の実験の時など、実際の実験よりも実験レポートで書く、考察や結論に苦労した経験はありませんか。実はこの部分が非常に重要で、実験でいくらか良い結果が出ていても、きちんとした考察が書けないと、せっかくの実験結果もインパクトが半減し、損をしてしまいます。では、どの様にすれば良い考察が書けるのでしょうか。

私は卒業論文の考察部分を書く際に非常に苦しみました。それは、考察を書くためには、自分の実験に対する背景、実験過程や実験原理に加えその分野の基礎知識など色々な

知識が必要なので、それを調べるために何度も図書館と研究室を往復したのを覚えています。しかし、この部分は良い考察を書く上では必要不可欠です。では、効率よく考察を書くことはできないのでしょうか。

残念ながら、勉強を抜きにして良い考察を書くことは出来ません。しかし、自分に合った本を早く見つけることで、効率的に勉強を進めることは出来ます。過去にこの「AGULI」でも多くの方が書かれているように本の検索には色々な方法があるので、一通り試してみ、大学生の早い時期から自分に合った本を探すことに慣れておくといいと思います。特に「J Dream II」といった文献の検索など、まだ馴染みがないと思いますが1回は使ってみるといいでしょう。

また、考察を書く際には、その部分を書く為に使用した参考文献を載せましょう。考察の中でビシッと参考文献が載せられているのと、いないのでは説得力が違います。そして色々な本を読んで身につけた基礎知識を存分に使って結果に対する自分の意見を書いてください。もちろん間違っている部分もあるでしょう。しかし、「自分はこう思うんだ」ということを、勉強してきた知識を使って論理的に説明出来ていればいいと思います。大学での集大成といえる自分の努力を発表する良い機会なのでぜひ頑張ってみてください。

(理工学研究科 理工学専攻 機能物質創成コース)

## 王道はない

石崎晴己

ISHIZAKI Harumi

「卒論・レポート必勝法」というテーマを頂戴したが、まず言っておきたいことは、卒論にもレポートにも「王道はない」ということである。念のため言っておくと（というのも、この頃は、格言や諺などの決り文句が、思いもよらぬ解釈で通ってしまうことが多いからであるが）、「王道」とは、「正統な道」という意味ではなく、「王が安楽に進むために特別に設えられた道」という意味で、それというのも、これはかの有名な幾何学者エウクレイデスが、エジプト国王プトレマイオス一世に言った「幾何学に王道はない」という科白から由来するのだからである。ここでの「王」は、いわゆるヘレニズム時代の「東洋的専制君主」を想定するもので、われわれ中華漢字文明圏に属する者が想起する「王」（「王道」対「霸道」のような）とは全く無関係な共示体系に属するものなのである。

ところで私は今日まで、フランス文学科の学生の教育に当たって来た者であるから、私が「卒論・レポート」と言えば、フランス文学科の教育を前提とすることになる。フランス文学科での卒論・レポートのための本質的作業は、「テキストを読む」ことである。作家の生涯などについて調べよ、というような課題の場合は別として。必ずしもフランス語のテキストとは限らないにしても、「読む」ことが基本である。つまり「いかに書くか」の前に、「いかに読むか」が重要である。

よくあるのが、作品の解説文をそのまま引き写したり、複数の解説文を適当に組み合わせたり、という手で、私は「コラージュ」と呼ぶ

のだが、そんなものからは独自性のあるものは生まれない。それどころか、往々にして書いた当人も分からないような文の羅列しか生まれない。「ここはどういう意味か」と聞かれても、一向に説明できないことになる。もっと悪くすると、見解を異にする著者からの引用を、そのまま羅列してしまうこともある。こうなると支離滅裂になる。他人の書いたものを取り入れる場合にも、やはり文献批判が必要なのだ。

私が推奨するのは、「読書ノート」を付けることである。そして読みながら頭に浮かんだこと、疑問、着想、連想、感想を、一行一行、パラグラフ毎、ページ毎に書き出して行く。こうすると、難解に思えた文の内的脈絡もよく見えて来るし、いくつもの疑問が自然と関連し合い組み合わせり出して、他のテキストへと疑問が広がって行く。待てよ、この語は、あの作品のあの箇所にも出て来たぞ、このイメージは、あそこあそこにあったのとよく似ているような気がする。そこで、その箇所を読み返す、というわけである。いわゆる「問題発見能力」は、このような作業の中から培われるのだ。小説などについては、節ごとに事項を書き出して並べてみると、全体の構成について意外な発見があるものである。

卒論は、レポートの自然な拡大（特に形式的に整備した）とも言えるが、しかし実践的にはレポートとは全く違うものと覚悟すべきだろう。しかし私としては、最初から違いを強調して学生諸君のやる気を挫くのは、採るべき態度ではないと考えている。

（総合文化政策学部 フランス思想・文学）

# Joy of Work, Joy at Work

清水 康 司

SHIMIZU Yasushi

1997年に国際政治経済学部でゼミ（演習）を開講して以来、4年次の清水ゼミの履修条件は「卒論提出」が義務付けられている。履修段階で必ずゼミ生には「卒業論文は大学時代の集大成。永遠に残る作品だから、十年後、二十年後、三十年後に読み直しても悔いのないように執筆しよう!」と檄を飛ばしている。毎年1月に卒論発表会を行い、合格者全員の卒論を「卒業論文集」として製本し、卒論原本ファイルとゼミ合宿をはじめとするゼミの思い出の写真をCD（DVD）に収めて卒業記念として配付している。4年生にとってこの「ゼミ卒業記念品」を受け取る想いはさまざまである。なにしろ同期のゼミ生の論文をお互いに読めることから、その後のゼミの同窓会ではそれをネタにタイムスリップし、充実した思いに耽る者もいれば、もっと頑張れば良かったな〜と惜しむ者もいるようだ。だからこそ、「卒業論文」は大切に書いて貰いたい。

3年次の清水ゼミでは前期に Summer Paper、後期に Winter Paper として必ず1本ずつペーパーを課し、それらを基に卒論に結びつけるケースが多い。しかし、学生によっては就職活動を通して興味が変わり4年になってから大幅に論文題目を変更することもある。3年次から一貫してテーマ選びは学生の主体性に任せている。他人から「書かされている」という意識のもとで文章を書いても出てくる結果には満足はいかない。むしろ、「書きたい、書かすにはいられない」という問題意識で取り組まなければ本人にとっては苦痛である。半年ごとのペーパー・プレゼンテーションでは「自分の論文（テーマ）がいかに楽しいものか、他のゼミ

生にこれは伝えなければいけない」という使命感で報告がされる。楽しくなければ学問ではない。*Joy of Work, Joy at Work* の精神で論文に取組みたいものである。

ではテーマや書き方について何かヒントはないのだろうか。一般的に小さく具体的に絞ったテーマが書き易い。大きすぎるテーマだと時間的制約で手に負えなくなり途中で思考が止まり、なかなか進まなくなることがある。また、論旨が不明確になり結論が導き出せないなどの問題が生じる。

論文の書き方としては以下の5点が明確に記されていることが望ましい。

1. *What's new ?*
2. *So what ?*
3. *Methodological*
4. *Theoretical*
5. *Hypothetical (proof)*

★ *There is no royal road to learning.* 「学問に王道なし」と言われるように、いきなり論文を書くことは難しい。講義や社会で興味を持った知識を一つ一つ積み重ね自分のものにしていくことが肝要である。一般的な方法としては、興味あるテーマに関する先行研究を行い、そこから未解決の問題点や参考文献を探ることからはじまるだろう。このとき最も助けてくれるのは「大学図書館」である。図書館は「宝の山」であり、最大限に利用して欲しい。

最後にもう一度。卒論は *Joy of Work, Joy at Work* の精神で楽しみながら作成しよう。

(社会情報学部教授 経営科学、ファイナンス)

## ビジネス実務とレポート

眞田久雄

SANADA Hisao

大学や大学院を卒業された後、研究者の道を進まれる方々を除いて、多くの方が民間企業に進まれ、いわゆるビジネス実務に携わられることになるものと思います。博士論文のご指導をいただきながら、日常は実務に携わっている者からみると、レポート作成は当然、大学や大学院の単位取得のための要件であり、これを満たさなければ次のステップにも進めないことになってしまいますが、ただそれだけにとどまらない、多くの皆さんにとって将来必要なスキル（リサーチと報告書作成）を育む機会となるのではないかと思います。今回ご依頼をいただきましたこの小論ではビジネス文書の内、多少のリサーチを必要とするような報告書の作成のために私が心がけている点を記させていただきます、大学や大学院でのレポートとの類似点を考えてみたいと思います。

たとえば昨今、上場企業が対応を求められたものとして、内部統制の強化があります。金融商品取引法という法律で、上場企業内の財務諸表に係わる重要な業務について、業務の効率や資産の保全を通じて信頼性のある財務報告を行うための業務プロセスやモニタリング体制の構築を求められるものです。この結果、上場企業の担当部門では、必ず、法律の内容・時期・その影響・対策等を経営層に報告する必要がでてきます。特に、金額その他の影響が大きい場合や経営層や経理・財務の担当部門のみならず、販売、事業企画、在庫管理、固定資産管理、IT部門など様々な担当部門レベルでの影響が考えられる場合にそれらの関係する部門と対策を協力して実行するために、文書による報告書が必須となります。

このとき、複雑な事象を多くの人にわかりやすい報告書を作る際のポイントは一言で言うと

いわゆる「5W1H」がはっきりとした報告書・レポートを作成すべきと言うことではないでしょうか。この「5W1H」は元々は新聞記者が記事を書く際に記事に含まれるべき基本的な内容を言ったものだとすることを記憶しておりますが、これらの When（いつ）Where（どこで）Who（誰が）What（何を）Why（なぜ）How（いかにして）はどのようなレポート・報告書にも共通して含まれるべき内容だと思います。

先ほどの内部統制の例では、When は「いつから金融商品取引法が実施されるのか」や「影響がどれだけの期間発生する」などであり、Where（どこで）は対象となる会計勘定科目など、Who（誰が）は対象となる事業・部門、また What（何を）は適用される法律の内容、Why（なぜ）は法律の背景、How（いかにして）はいかに会社としての法的要件を満たすために対応するための対策、関連する事項（「情報漏洩対策」）と対策ツールの導入（たとえばインターネットを通じた情報漏洩を防ぐための「フィルタリングソフト」<sup>1)</sup>）などの事項について述べられなければならないでしょう。

これは会計学の授業の、たとえば「内部統制とその上場企業への影響を論ぜよ」と言ったレポートのテーマ及びそれに対する回答と、個別企業の事情や状況を除けば全く同じものになるはずで、皆さんが将来進みたい道と関連する大学や大学院の授業やそのレポート作成の経験とそのためのスキルは将来ビジネスで求められる基礎なりサーチ能力と「5W1H」を押さえた文書作成と基本的に変わらないものだと思います。

<sup>1)</sup> フィルタリングソフトについては代表的ソフトウェアとしてデジタルアーツ社「i-FILTER」がある。詳細は <http://www.daj.jp/>

注：本小論の内容は筆者の個人的意見であり、所属する企業・団体とは一切関係ありません。  
(国際ビジネス研究科 博士課程後期)

# イタリア国立サン・マルチャーナ図書館を訪ねて (その2)

三 嶋 輝 夫

MISHIMA Teruo

かくしてそれからの三日間、朝から午後までその貴重書室に通ってベッサリオンがかつて所有し、後に寄贈したプラトンの写本を中心に内容をチェックしたのであった。そしてどうしても欲しいものを選び出してマイクロフィルムのコピーを日本に送ってくれるように依頼したところ、快諾してくれたのみならず、意外なことに代金は到着後でよいとのことであった。これで所期の目的は果たしたのであったが、そこでつい欲が出てきたのである。というのはコピーを頼んだ写本の一つの説明に「最も美しく最も正確な写本」とベッサリオン本人が述べているとあり、どうしても一目その原物を見たくなったのである。そこで恐る恐る顔なじみになったライブラリアンの婦人に頼んでみたところ、“Poco.”（「ちょっとだけよ」）ということでお許しが出たのである！運ばれて来た電話帳のようなサイズの本を木製の大きな書見台に置いて開いてみると、金や朱で美しく彩色された頁に、流麗な書体で鮮明にプラトンのテキストが記されている（写真1参照。カラーでないのが残念だが）。館

員の婦人も初めて目にしたらしく、小生に劣らず熱心に見入っていたので、些か調子に乗って、冒頭の部分を音読した次第であった。

さてこれで念願が叶ったのであるが、欲には限りがないもので、今度は図書館の全体を見学したくなったのである。既に一階の貴重書室と右手の一般閲覧室（前号、写真2参照）は見たのであるが、上の階がどうなっているのか知りたくなったのである。そこで本学で図書館に関係していることを明かして、先の婦人に案内を乞うたところ、偶々そこに居合わせた英語の達者な男性の館員と一緒に案内してくれることになった。そしてお二人の案内で、事務室として使われている「ベッサリオン室」（写真2参照）から、高名なヴェネチア派の画家たちの作品で埋め尽くされた旧閲覧室まで見せて頂いたのである。最後に、帰国後図書館報に訪問記を寄稿し、それを御礼の印としてお送りすることを約束して、お二人と図書館に別れを告げたのであった。

（文学部史学科教授 倫理学、美学）



写真1 プラトン『ラケス』冒頭



写真2 ベッサリオン室と館員の御二人

## 世界で最も美しい雑誌 『ヴェルヴ』

1号～37/38号(1937-60年刊)

『ヴェルヴ』VERVEは1937年から60年まで、パリで刊行された美術雑誌です。

この雑誌を創刊し、編集責任者であったのは、美術出版者として有名なテリアード(1897～1974)です。

創刊号はマティスのデクパージュ(切り抜き)によるオリジナル作品をリトグラフ印刷した表紙が飾りました。これ以降も表紙は、この雑誌のために描かれたオリジナル作品が多かったようです。第1号はアンドレ・ジイドの造形芸術論をはじめ、マン・レイ、カルティエ=ブレッソン、ブラッサイらの写真、レジェによる1937年のパリ万国博覧会の印象記など多彩な内容です。こうした総合的ないかにも雑誌らしい内容の号は第8号(1940年夏)までで、後は第16号(1946年11月)までの中世の彩色写本の特集や、その後の個人作家特集など、一テーマによる画集のようなものになってしまいました。『ヴェルヴ』が雑誌としての独自性、斬新さを見せていたのは、第8号までだったといえます。

わが国では、早い時期から画家の高島達四郎やライオン歯磨の広告のチーフ・ディレクター達が買っていたようですが、日本人が広く『ヴェルヴ』の名を知るのは第19、20号「ピカソの色彩」(1948年4月)の頃からです。

『ヴェルヴ』が世界で最も美しい雑誌と呼ばれる理由のひとつは、テリアードが創刊時から一貫して費用を顧みず印刷に力を注いだことによるものでした。印刷法と場合によっては紙質も題材に応じて変えました。彩色挿絵のような精緻な図版には、ドラジェ工房のカラー・グラビア印刷を用いて非常に鮮明な

『ヴェルヴ』創刊号  
(1937(昭和12)年)  
表紙



『ヴェルヴ』創刊号  
(1937(昭和12)年)より  
写本の彩色挿絵

『ヴェルヴ』第37-38号  
(1960年最終号)  
聖書のためのデッサン集  
マルク・シャガール



複製を可能にしました。

1960年シャガールの「聖書のためのデッサン集」を集めた第37、38号を最後に、『ヴェルヴ』は廃刊となりました。

その後のテリアードは、このリトグラフ技術をさらに生かして、以前から刊行していた版画集『画家の本』に本腰を入れて、シャガールの「ダフニスとクロエ」(1961年)、ミロの「ユビュ王」シリーズなどを刊行しました。

展示：7月～9月 大学図書館本館

参考文献：『芸術新潮』1988年3月号

(本館運用課 伊藤義裕)

# 図書館広報板

## 本館

7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

通常開館 月～金：9:00～21:40 土：9:00～21:00

開館時間 月～金：9:00～19:00

休日開館、夏期休業中の土曜日 12:00～19:00

休館日

\*7/20、9/14はオープンキャンパスにより 10:00～19:00

●試験期貸出……7/4～7/24

冊数：通常通り

貸出期間：1週間(全学部生・短大生)

延長期間：1週間(全利用者)

※上記期間、卒業生には貸出・延長できません

●夏期特別貸出……7/25～9/12

冊数：10冊(全学部生・短大生)

返却期限日：9/26

★夏期休業期間に、閲覧室改装工事のため、開館日が変更になる場合があります。  
その場合は、図書館内掲示物やホームページでお知らせいたします。

## 万代記念図書館

7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

通常開館 月～金：9:00～20:00 土：9:00～17:00

開館時間 月～金：9:00～16:00 土：12:00～16:00

開館時間 月～金：9:00～17:00 土：9:00～13:00

休日開館 10:00～17:00

休館日

●試験期貸出……7/4～7/24

冊数：通常通り

貸出期間：1週間(全学部生・短大生)

延長期間：1週間(全利用者)

※上記期間、卒業生には貸出・延長できません

●夏期特別貸出……7/25～9/12

冊数：10冊(全学部生・短大生)

返却日：9/26

## 編集後記

フランスの博物学者ビュフォンは「文は人そのもの」と言っていますが、そうであるなら、他人の文章を無断で借用するなどということは許されるはずもありません。卒論もレポートも言ってみれば文章の延長、ビュフォンの言葉を肝に銘じて、いざ執筆。  
(鳥居正文)

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報“AGULI”第82号 2008年7月1日発行

編集 青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当 TEL. 03-3499-1402 FAX. 03-3407-4472

発行 青山学院大学図書館 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 <http://www.agulin.aoyama.ac.jp/>